〔堀河院御時百首〕霜　修理大夫顯季

小筵に思ひこそやれ篠の葉のさやぐ霜夜のをしのひとりね

〔玉葉〕承久二年十一月五日辛卯、此日皇太子懐成三歳○仲恭御著袴也、○中略　祿物領狀國々○中略

小筵卅枚　長門

〔拾玉集七〕山家

さむしろや猶大原にしくはなしつゞく聖の跡も哀に

〔蜻蛉日記中ノ中〕つれ〴〵とあるほどに、ひ○ひ下恐脱ニが字ん にいりぬれば、なをあるよにはしやうじせんとて、○て下恐脱ニう字はむしろたゞのむしろのきよきをしきかへさすれば、ちりはらひなどするを見るにも、かやうのことは思ひがけざりしものをなどおもへば、いみじうて、

うちはらふちりのみつもるさむしろをなげくかずにはしかじとぞおもふ

〔金槐和歌集戀〕まつ戀の心をよめる

さむしろにひとりむなしく年もへぬ夜の衣のすそあはずして

小筵にいくよの秋をゑのびきぬ今はたおなじ宇治の橋姫

曉の戀

さむしろに露のはかなくをきていなば曉ごとに消や渡らん

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月十四日丁卯、將軍家○宗尊親王始御參鶴岡之八幡宮、○中略次御弓始、射手六人立烏帽子、水干、葛袴、淺沓、入南門候弓場左右小筵、

〔東北院職人歌合〕七番　右　筵打

うちをける戀のさむしろいたづらにねぬ夜の月にしく物ぞなき

〔三中口傳三〕一三條鋪設裝束事

以產地爲名